

不登校高校生の不安とソーシャルサポートに関する研究

赤塚 史
岩元 澄子

要 約

本研究の目的は、不登校生について、不安に焦点をあて、ソーシャルサポートとの関連を明らかにすることであった。不登校生21名、登校生63名を対象に比較検討した。STAIとソーシャルサポート尺度を用いて比較した結果、不登校生は登校生に比べ、不安が高く、ソーシャルサポートが低いことが示された。特に、親からのサポートに、不安と負の相関がみられた。また、不登校生と登校生の各1名の聞き取り調査の結果からも、不登校生の不安の軽減のためには、現在のサポート状況を把握し、有用なサポート体制を個別に整備することの重要性が示唆された。

キーワード：高校生、不登校、不安、ソーシャルサポート

問題と目的

不登校とは、従来、学校恐怖症 (school phobia) や登校拒否 (school refusal) と呼ばれたものを、より包括的に捉え直した概念であり、「何らかの心理的、情緒的、身体的、あるいは社会的要因・背景により、登校しない、あるいはしたくてもできないという状態」である (森嶋, 2005)。

文部科学省 (2008) によると、平成19年度の「不登校」を理由とする長期欠席者数 (年間30日以上) は、小学校 2万3926人、中学校10万5197人の計12万9254人であり、一旦減少がみられていたにも関わらず、ここ数年再び増加傾向にある。様々な対策・対応がなされているにもかかわらず、不登校は依然として、わが国における大きな社会問題であり、教育課題である。

わが国における不登校に関する研究は1960年代にはじまるが、その中でストレス反応に関する研究としては、齋藤・松岡・黒沢・森・栗田 (2005) による、中学時代に不登校歴のある高校生を対象に、回想法によって、不登校時には、ストレス反応である身体症状や抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無力感が強いことを示し

た報告がある。しかしながら、不登校の臨床場面で大きなテーマとなる不安や抑うつ (上地・高倉, 2000) といったストレス反応に焦点づけ、それについて現在不登校状態にあるものを対象として検討した研究はない。また、「自己を取り巻く周囲のさまざまな人から得られる心理的あるいは実態的な援助」(嶋, 1994) であるソーシャルサポートに関しても、不登校中高生は低いことが報告されている (菊島, 1999; 齋藤ら, 2005; 渡辺・蒲田, 1999)。しかし、一般の中学生を対象として、ストレス反応とソーシャルサポートは負の相関があることや (岡安・嶋田・坂野, 1993)、ストレス反応は、サポートの受け手の属性や、サポート源によって軽減効果が異なるという結果が多く報告されている (岡安他, 1993; 本間・柏谷・花屋, 2005; 嶋, 1994) のに対し、不登校生についてそれらの実証研究はおこなわれてはいない。

そこで、本研究では、不安について、状態像としての不安と脆弱性としての不安に焦点をあて、不登校生の不安とソーシャルサポートの関連について、質問紙による調査と事例による検討をおこなった。

質問紙調査

方 法

対象

対象は、A 通信制高校の週 5 日登校することになっている通学コース 5 クラスに在籍する 120 名のうち、調査の趣旨について説明の後に協力の得られた 84 名 (男子 31 名, 女子 53 名) であった。不登校生 (登校日数が週 2 ~ 3 日以下) は 21 名 (男子 7 名, 女子 14 名: 以下, 「不登校群」とする), 登校生 (登校日数が週 4 ~ 5 日以上) は 63 名 (男子 24 名, 女子 39 名: 以下, 「登校群」とする) であった。

なお, 調査実施にあたり, 当該高校長および担任教師に調査の趣旨と調査方法について説明し, 倫理上の諸問題について吟味のうえ, 調査実施の承諾を得た。

質問紙の構成

フェイスシート

性別, 登校状況, 不登校歴の有無を尋ねた。

State-Trait Anxiety Inventory 日本語版 (以下 STAI)

Spielberger (1970) の考案した STAI をもとに水口・下仲・中里 (1991) によって日本語版として作成された, 不安についての自己評価尺度である。測定時点での不安の強さを示す「状態不安」と, 性格特性として不安になりやすさを示す「特性不安」の各 20 項目について, 4 段階, 状態不安尺度は (全くちがう~その通りだ), 特性不安尺度は (ほとんどない~しよっちゅう) で評定する。

ソーシャルサポート尺度

嶋田 (1996) によって作成された, サポート源とサポート期待感について測定する自己評価尺度である。「情緒的サポート」「実体的サポート」「情報のサポート」の計 5 項目 (1 因子構造) について, 父親・母親・男性友人・女性友人・教師の 5 つの対象別に期待感を 4 段階 (絶対ちがう~きつとそうだ) で評定する。サ

ポート源に該当する人がいない場合, 回答をおこなわない。

手続き

調査期間: 2006 年 7 月

クラスごとに, 担任教師に, 一斉法・無記名方式で実施してもらった。

STAI について, 状態不安と特性不安の区別がつかうよう, 担任教師に教示文の中の「いまの自分の気持ちによくあうと思うところに (状態不安)」、「ふだんの感じている通りに (特性不安)」の部分を強調してもらった。

ソーシャルサポート尺度について, 父親・母親・男性友人・女性友人のサポート源に該当する人がいない場合は, 回答をおこなわないこと, また, 男性友人・女性友人については, 学校での同級生だけでなく広い範囲で考えること, その際対象と考える人は特定の人も, 何人かの人もよいことを教示してもらった。なお, 男性友人・女性友人は, フェイスシートによって同性友人・異性友人としてデータ処理をおこなった。

結 果

1) ソーシャルサポート尺度の信頼性の検討

ソーシャルサポート尺度について, Cronbach の係数を求めた。その結果, 父親は.90, 母親は.93, 同性友人は.88, 異性友人は.91, 教師は.94と高い水準にあり, すべてのサポート源において高い内的整合性が認められた。

2) 不登校生と登校生の不安の比較

まず, 不登校群 (登校日数が週 2 ~ 3 日以下) と登校群 (登校日数が週 4 ~ 5 日以上) の不安の違いを検討するために, 状態不安, 特性不安それぞれについて t 検定をおこなった (表 1)。その結果, 状態不安では不登校群のほうが登校群よりも高い傾向があり ($t_{(77)} = 1.71, p < .10$), 特性不安では不登校群のほうが登校群よりも有意に高い ($t_{(77)} = 2.52, p < .01$) が示された。

表 1 不登校群と登校群の不安の比較

	不登校群 (N=20)		登校群 (N=59)		t 値
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	
状態不安	52.50	7.38	48.36	9.70	1.71 ⁺
特性不安	59.10	8.62	52.75	9.90	2.52 ^{**}

⁺p < .10 ^{**}p < .01

3) 不登校生と登校生の不登校歴の有無別の不安の比較
 不登校生と登校生に不登校歴を加味し、不登校歴有り不登校群 (n=16), 不登校歴無し不登校群 (n=4), 不登校歴有り登校群 (n=35), 不登校歴無し登校群 (n=24), の4群の不安の違いを検討するために、状態不安、特性不安それぞれについて被験者間一要因分散分析をおこなった(表2)。その結果、特性不安について登校形態に有意な差が示された ($F_{(3,75)} = 2.82, p < .05$)。多重比較の結果、不登校歴無し登校群よりも不登校歴有り不登校群、不登校歴無し不登校群のほうが特性不安は有意に高い ($Mse = 8.40, p < .05$) ことが示された。

4) 不登校生と登校生のソーシャルサポートの比較
 登校状況とサポート源を要因とする2(不登校群、

登校群) × 5(父親, 母親, 同性友人, 異性友人, 教師)の二要因混合分散分析をおこなった(表3)。その結果、交互作用はみられず ($F_{(4,284)} = 1.36, ns$)、登校状況 ($F_{(1,284)} = 8.73, p < .01$) とサポート源 ($F_{(4,284)} = 6.08, p < .01$) に主効果がみられた。多重比較の結果、父親, 母親, 異性友人, 教師よりも同性友人からのサポートは有意に高い ($MSe = 16.18, p < .05$) ことが示された。

5) 不登校生の不安とソーシャルサポートの相関
 不登校群の不安とソーシャルサポートの相関分析をおこなった(表4)。その結果、特性不安とソーシャルサポートでは低い負の相関傾向がみられた ($r = -.30, p < .10$)。また、不登校群の不安とサポート源別の相関分析を

表2 不登校群と登校群の不登校歴の有無による不安の比較

	不登校歴有り 不登校群(N=16)		不登校歴無し 不登校群(N=4)		不登校歴有り 登校群(N=35)		不登校歴無し 登校群(N=24)		F値	多重比較
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差		
	状態不安	52.56	7.22	52.25	7.98	48.74	8.48	47.79		
特性不安	59.75	7.64	59.75	11.71	54.26	8.23	50.54	11.64	2.82*	不登校歴有り不登校群, 不登校歴無し不登校群 > 不登校歴無し登校群

*p<.05

表3 登校状況別およびサポート源別のソーシャルサポートの比較

A	不登校群					登校群					F値		
	父親	母親	同性友人	異性友人	教師	父親	母親	同性友人	異性友人	教師	A	B	A×B
延べ人数	19	21	21	17	21	54	61	63	50	62	8.73**	6.08**	ns
平均	11.58	10.84	14.26	11.58	12.95	12.28	14.41	16.28	12.94	13.37	多重比較		
標準偏差	3.76	3.84	3.37	4.73	4.91	4.38	4.22	3.29	3.99	4.18	同性友人>父親, 母親, 異性友人, 教師		

**p<.01

表4 不登校群の不安とソーシャルサポートの相関

ソーシャルサポート 合計(N=16)	サポート源別					
	父親 (N=18)	母親 (N=20)	同性友人 (N=20)	異性友人 (N=16)	教師 (N=20)	
状態不安	-0.12	-0.47*	-0.24	0.24	0.29	-0.16
特性不安	-0.30 ⁺	-0.64**	-0.41 ⁺	0.14	0.20	-0.29

⁺p<.10 *p<.05 **p<.01

おこなった (表 4)。その結果、状態不安と父親からのサポート ($r = -.47, p < .05$)、特性不安と父親からのサポート ($r = -.64, p < .01$) で有意な中程度の負の相関がみられた。また、特性不安と母親からのサポートでは中程度の負の相関傾向 ($r = -.41, p < .10$) がみられた。

考 察

不安について、本研究では、不登校群は登校群よりも、状態不安は高い傾向にあり、特性不安は有意に高いという結果が得られ、不登校生は登校生に比べ不安が高いことが明らかになった。このことから、不登校生には、不安に対しての何らかの支援が必要であることが示唆された。山崎 (2005) は一般高校生では、男子よりも女子ほうが不安が高いという結果を示しているが、本研究では性別の偏りと、対象の不足から、性別ごとの検討はおこなわなかった。今後は対象数を増大させ、不登校生についても性別による違いについて検討することが望まれる。さらに過去の不登校歴も加味したところ、これまでに不登校歴のない群よりも不登校歴に関わらず現在不登校である群のほうが、特性不安は有意に高いという結果が得られた。これらのことから、眼前の不登校生は、元来、不安に関する脆弱性が高い可能性があり、このことをふまえた支援が肝要であることが示唆された。本研究では、状態としての不安と、不安脆弱性の 2 面から不安を捉えたが、そのことによってもたらされた知見は、不登校の支援にあたっては、生徒の不安に関する脆弱性に日常的に着目しておく必要があることを示唆するものとし、臨床的に有用な結果を示すことができたと考える。

ソーシャルサポートについて、第一に、本研究では、不登校群は登校群よりも、ソーシャルサポートが低いことが明らかとなった。すなわち、不登校生は登校生に比べて、ソーシャルサポートを受けているとは知覚していないことが示された。蒲田・渡辺 (1994) も、不登校生のほうが登校生よりもソーシャルサポートが低いことを報告しているが、本結果はこれを支持するものである。学校に行けば、同性の友人をはじめ、友人や教師と会い、関わり、結果的にサポートを得る機会が増えると考えれば、逆に学校を休んでいれば、その機会は少なくなるだろう。このことが反映された結果なのかもしれない。そうであれば、学校を休んでも本人がサポートを受けることが期待できると感じられるように、本人の周囲に適切な働きかけをおこなうことが、支援のひとつとして考えられる。第二に、

登校生と比べ不登校生に特徴的なサポート源はなく、いずれも、両親や異性友人、教師よりも同性友人からのサポートを高く知覚していることが示された。これは、一般高校生を対象とした嶋 (1994) や橋渡・別府 (2003) の知見とも一致する。このことから、この結果は、高校生の年代にとって同性の友人関係が重視される対人関係の発達学的特徴を反映した結果と考える。また、中学生を対象にした橋渡ら (2003) の研究では、教師からのサポートは不登校生のほうが有意に高く、友人からのサポートは登校生のほうが有意に高いことが報告されているが、本研究では、そのような結果は得られなかった。学校で、教師が日々顔を合わせることもない不登校生への支援をどのようにおこなっていくかは重要な課題である。しかし、高校生は、義務教育課程を終えているし、教師によるサポートにとどまらず、本人にとって身近な人たちによるサポート体制を整えるといった工夫も必要ではないかと考える。

不登校生の不安とソーシャルサポートの相関をみたところ、特性不安に関して負の相関傾向が示された。さらにサポート源別には、状態不安も特性不安も父親からのサポートと負の相関がみられ、特性不安は母親からのサポートとも負の相関傾向があることが示された。これによって、ストレス反応とソーシャルサポートは負の相関があるという先行知見 (岡安ら, 1993) に対して、不安に焦点をあててより具体的な知見を追加できたと考える。ストレス反応と両親および友人からのサポートとの関連を検討した橋本・谷口・田中 (2005) は、親からのサポートの方が友人からのサポートよりもストレス反応とのあいだに高い負の相関があることを見いだしているが、本研究では、高校の不登校生において、不安に対する脆弱性と親からのサポートに関連があることが示唆された。これらのことから、水野・谷口・福岡・古宮 (2007) も指摘しているように、ストレス反応を低減するうえでは、両親からのサポートが重要であると考えられる。今後は、両親のどのような関わりが、不登校生にとって、サポートが期待されるという知覚に結びついているのか、具体的に検討する必要がある。橋本ら (2005) と同様に、本研究でも、友人からのサポート量は多かった。しかし、不安との相関はみられなかった。このことについて、高校生の年代にとって、友人関係の持つ意味とその影響力は大きく、日常的にサポートを受けているとしても、実際に不安感が高まるような問題をかかえたときに、友人にそのことを言語化して、サポートを求めることには困難があるのかもしれない。不登校生自身の

サポート希求の問題も含め、本人のコーピングを高めることで友人からのサポートをうまく利用し、不安を緩和することにつながる支援も期待される。

面接調査

目的

研究の質問紙調査に協力の得られた84名のうち、面接調査に同意の得られた不登校生と登校生の各1名に面接を実施し、不安とソーシャルサポートの関連について検討した。面接は、各事例ごとに、年齢、在籍期間、登校状況、不登校歴、同居家族、不安の有無、不安の強さ、ソーシャルサポートの利用、サポート源、知覚されたソーシャルサポート、不安とソーシャルサポートの関連、本人が求めるソーシャルサポートの内容とサポート源について半構造化によっておこなった。

<事例提示>

事例1 Aさん（不登校群）

女子 16歳

在籍期間：二年未満

登校状況：週に2～3日

不登校歴：有り

同居家族：父親、母親、姉（19）、妹（14）。ただし、現在は一人暮らし。

STAI：状態不安（48点；高い）、特性不安（53点；高い）

ソーシャルサポート：父親（8点）、母親（8点）、同性友人（18点）、異性友人（17点）、教師（18点）、合計（69点）

Aさんは、週に2～3回しか学校におらず、前述の質問紙調査では不登校群の事例である。不安状態で、不安に対する脆弱性も顕著に認められた。友人や教師からのサポートを高く知覚しているのに対して、両親からのサポートの知覚は低く、サポート源の偏りも顕著であった。橋本ら（2005）が指摘しているように、Aさんも、友人からのサポート量は多かったが、不安は高く、実際にサポートを多く受けていると思っても、不安を緩和するには至っていなかった。Aさんは、高校入学と同時に親元を離れ県外で生活していたが、両親については、普段から口やかましさを鬱陶しく思っていること、いまは両親からのサポートを望んでいないことが述べられた。面接時のAさんの様子から、両親は、むしろそっとしておくことが、A

さんにしてみれば見守ってもらっているというサポートの知覚につながるのではないかと思われた。Aさんは三姉妹の二女であるが、姉については、愚痴をこぼすことができ、いてくれるだけで楽になる貴重な存在であると述べた。しかし、姉とも現在は別居で、一人暮らしである。今回使用した質問紙にはサポート源としてきょうだいを尋ねる質問は含まれていないが、Aさんが姉をキーパーソンとしてあげたことから、質問紙での限界を補う面接等によって、個別にソーシャルサポートの状況を把握していくことが重要であることが示唆された。

事例2 Bくん（登校群）

男子 16歳

在籍期間：半年未満

登校状況：週に4～5日

不登校歴：無し

同居家族：父親、母親、弟

STAI：状態不安（34点；普通）、特性不安（36点；普通）

ソーシャルサポート：父親（15点）、母親（20点）、同性友人（19点）、異性友人（18点）、教師（20点）、合計（92点）

普段から心配事もなく、悩みもないと述べ、不安を感じている様子はほとんどなかった。いずれのサポート源からのサポートも平均的に知覚していることが示された。ソーシャルサポートの知覚は高く、学校行事の大役を任されて不安を感じたときに、友人や教師からのアドバイスにより安心したことがあったと述べた。進路についても両親や教師によく相談していた。その時々々のストレス反応として不安が生じることがあっても、様々なサポート源を利用し、対処していた。

まとめと課題

今回の調査の対象となった高校生は、中学時代に、あるいは別の高校で、不登校をはじめ、なんらかのつまづきを経験し、紆余曲折を経て、今回の調査に協力の得られた学校に入学した生徒たちである。通常の高校に在籍する生徒とは学校生活上の相違点が少なからずあると思われる。したがって、今回の結果をもって高校の不登校生の一般的な特徴とするには問題があるかもしれない。しかし、サポート校やフリースクールなどの民間の教育機関の増加を考えると、受け皿としての機関の必要性が問われていることは明らかである。今回の結果は、そのような機関に在籍する不登校生の

理解や支援のための一つの手がかりとして有用であると考える。

また、文部科学省の学校基本調査には上らない不登校生徒、あるいは登校はしていても「学校に行くのがいや」という、登校回避感情を有する生徒がかなりの数に上がることが報告されている(上地ら, 2000)。このために、「不登校予備群」や、不登校傾向のある生徒を対象とした研究もすすめられている(神田・大木, 2001; 上地ら, 2000; 菊島, 1999)。したがって、不登校の潜在群が存在するということを認識し、それが疑われる生徒に対しても、不安に対する脆弱性をアセスメントすることは、適切な支援の手がかりを得るうえで有用であると考え。また、専門家による伝統的臨床心理学の枠組みからの治療的関わりにとどまらず、家族・学校・社会などの、ソーシャルサポートを高めることも有用であろう。その際には、サポートを単純に量的にとらえるのではなく、個々の状況を質的に検討し、それに応じてサポート体制を整え、充実させることが望まれる。

引用文献

- 橋本 剛・谷口弘一・田中宏二 2005 児童・生徒におけるサポートと対人ストレス 高校生を対象にした検討 日本心理学会第69回大会発表論文集, 212.
- 橋渡和明・別府 哲 2003 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学, 52, 1-12.
- 本間恵美子・柏谷美紀・花屋道子 2005 適応指導教室通級生徒の対人ストレスとソーシャルサポート カウンセリング研究, 38, 61-73.
- 蒲田いずみ・渡辺弥生 1994 中学生の不登校児のソーシャルサポートに関する研究
- 神田信彦・大木桃代 2001 中学生の不登校の背景要因の検討 『人間科学研究』文教大学人間科学部, 23, 181-190.
- 菊島勝也 1999 ストレッサーとソーシャルサポートが中学校時の不登校傾向に及ぼす影響 性格心理学研究, 7, 66-76.
- 水口公信・下仲順子・中里克治 1991 日本版 STAI 状態・特性不安検査 三京房
- 水野治久・谷口弘一・福岡欣治・古宮 昇 2007 カウンセリングとソーシャルサポート つながり支えあう心理学 ナカニシヤ出版
- 文部科学省 2008 平成19年度学校基本調査速報 参考図表 全児童、生徒数に占める「不登校」の比率 (http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08072901/003/sanzu04.pdf)
- 森嶋昭伸 2005 文部科学省による不登校理解の変遷 臨床心理学, 5, 73-75.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, 41, 302-312.
- 齋藤香織・松岡恵子・黒沢幸子・森 俊夫・栗田 広 2005 不登校生のメンタルヘルス 通信制サポート校に在籍する不登校経験者への調査から ころの健康, 20, 36-44.
- 嶋田洋徳 1996 知覚されたソーシャルサポート利用可能性の発達の变化に関する基礎的研究 広島大学総合科学部紀要 理系編, 22, 115-128.
- 嶋 信宏 1994 高校生のソーシャルサポート・ネットワークの測定に関する一研究 健康心理学研究, 7, 14-25.
- Spielberger CD, Gorsuch RL, Lushene RE. 1970 STAI manual for the state-trait anxiety inventory California: Consulting Psychologists Press
- 上地 勝・高倉 実 2000 中学生における登校回避感情とその関連要因 学校保健研究, 42, 375-385.
- 渡辺弥生・蒲田いずみ 1999 中学生におけるソーシャルサポートとソーシャルスキル 登校児と不登校児の比較 静岡大学教育学部研究報告(人文・社会科学篇), 49, 337-351.
- 山崎武彦 2005 青年期の不安の変化 12年前との比較を通して 盛岡大学紀要, 22, 139-147.

A study of school non-attendance high school student's anxiety and social support

FUMI AKATSUKA (*Graduate School of Psychology, Kurume University*)

SUMIKO IWAMOTO (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

The purpose of this research was to focus on the school non-attendance students' anxiety in relation to their social support. 21 non-attendances students and 63 attendant students were asked about anxiety and their social support using the State-Trait Anxiety Inventory and the social support scale. The anxiety of non-attendance students group was higher than the control group. As for the result of their social support, it showed lower than the control group. Furthermore, lower support from parents related to their high score of anxiety. From the interview of 1 non-attendance student and 1 attendant student, the result suggested that it is important to grasp the situation and their individual support system for decreasing their anxiety.

Key words: high school student, school non-attendance, anxiety, social support